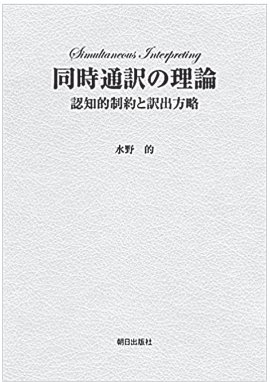
＜書評＞



水野的
『同時通訳の理論：認知的制約と訳出方略』
（朝日出版社、2015 年、A5 版、286 頁、2,778 円＋税、
ハードカヴァー）
ISBN 425500871X

評者　河原清志（関西大学）

A Theory of Simultaneous Interpreting: Cognitive Constraints and Translation Strategies by Akira MIZUNO *explores how simultaneous interpreting is made possible in spite of the heavy cognitive load, which increases as interpreters go on with simultaneous interpreting tasks between structurally different languages such as English and Japanese. This book deeply delves into the mechanism of cognitive process of simultaneous interpreting based on the theory of verbal working memory, and elucidates how interpreters utilize limited cognitive resources and try to overcome the cognitive constraints in order to achieve simultaneous interpreting tasks.*

1. 書き手その人

本書は日本通訳翻訳学会の現役の会長である水野的による単著『同時通訳の理論：認知的制約と訳出方略』（2015 年、朝日出版社）である。これは同氏による三十数年にわたる同時通訳研究の集大成の書で、世界でも最先端を行く通訳研究の金字塔と言っても過言ではない。

水野は、國弘正雄・鳥飼玖美子『英語で何をやる？』（1982 年、日本英語教育協会）の同時通訳の話題を読み、**「『同時』というが、一体どのようにしてそのようなことが可能になるのか、という驚きと疑問」**を抱いたことから通訳研究が始まったという。フルタイムの仕事を持ちながら、30 代から通訳の練習を始め、その数年後には通訳学校の講師として、またその数年後には衛星放送の試験放送で通訳者として抜擢されるなど、教育者・実務家としての能力も抜群に高い。以来、東欧革命、天安門事件、湾岸戦争、ソ連クーデターなど、歴史上数々の大事件の放送通訳を担当。また毎年のように NHK の放送通訳者としてアメリカ合衆国大統領年頭教書演説を同時通訳するなど、

KAWAHARA Kiyoshi, “Book Review: A Theory of Simultaneous Interpreting: Cognitive Constraints and Translation Strategies,” *Interpreting and Translation Studies*, No.17, 2017. Pages 203-209. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

まさに第一線で通訳者として活躍してきた。しかし、それも水野にとってはすべて「通訳研究」のための営為だったのであろう。あくまでも目指すところは國弘・鳥飼の一冊の本との出会いで触発された純粋な疑問の解明だったようだ。この疑問を 30 年以上にわたって追究し続けた結晶が、まさに本書なのである。

幅広く深い学識を有し、研究者としての能力も抜群に高いことの証左が本書であることは確かだが、水野はそれにとどまらない。本学会初代会長・近藤正臣氏が、1991 年に設立した本学会の前身である「通訳理論研究会」に第 2 回目から参加し、それ以来事務局を担当。1996 年からは大東文化大学大学院で講師として通訳を教え、また 2000 年には本学会の創立メンバーの一人として事務局長に就任。2002 年からは立教大学大学院特任教授として通訳・翻訳の実務と理論を教え、2011 年からは青山学院大学文学部教授として通訳・翻訳の実務と理論を教えるに至った。そして 2017 年に定年退職を迎えるまで、実に多くの授業や講演で通訳・翻訳に関する理論面での知的インスピレーションを与え続けてきた。その間、日本における通訳・翻訳研究をリードし、多くの後進を育成してきたおかげで、本学会も 2017 年現在で 400 名ほどの会員を有する大きな学会へと成長を遂げた。1991 年から数えると、2014 年 9 月に本学会の会長に就任するまでの約 23 年間、事務局という地味な仕事を直向きにこなしてきた。そのおかげで、今日の本学会があることは紛れもない事実である。水野は、その極めて優れた調整能力とバランス感覚、謙虚で温厚な人柄により、通訳・翻訳の実務家と、アカデミアの研究者との橋渡しをスムーズに行い、通訳翻訳研究領域が大学という研究教育機関でも広く認知されるに至らせた立役者の一人であることを、ここに記しておきたい。

2. 水野の原点 :「同時」というが、一体どのようにしてそのようなことが可能になるのか、という驚きと疑問

研究者としての原点はとても大切なもので、水野は常にこの研究の原点に立ち返り、これまで多く発表してきた論文を絶えず自己批判的に検証し研鑽を続けてきた。そのエッセンスが本書である。この原点たる疑問を、本書では以下のように研究の土俵に載せている。

1）複数の作業の同時遂行はいかにして可能になるか。
2）通訳者は構音抑制条件をいかに乗り越えているか。
3）通訳者は限定的な作動記憶容量をはじめとする認知的制約をいかに乗り越えているか。
4）言語変換はどのレベルでどのように行われているか。（p. 16）

そして、「本書の目的は、これまでの主要な同時通訳の理論を概観し、その批判を通じて『同時通訳はいかにして可能になるのか』を理論的に追究し、部分的実証への道筋をつけることである」としている（p. 17）。「部分的実証への道筋をつけること」を

目指している点も、水野らしい。極めて幅広い学識を有するにもかかわらず、難解な分野であるがゆえに衒学的になることを避け、（良い意味で）オッカムの剃刀を意識してか、脳神経科学など他の隣接諸分野の知見には敢えて言及せず、同時通訳研究として真っ当な方向へと「道筋」をつけながら、理知的に抑制した理論書としてまとめているからである。したがって、本書は大仰な仮説を振りかざすのではなく、同時通訳における作動記憶と、その制約を克服するための訳出方略に焦点を絞って仮説を立て、実験を行っている。具体的には以下の仮説と予測を検証している。

仮説：同時通訳において作動記憶の注意の焦点内に容量以上の項目を保持すると、保持していた項目の訳出が影響を被る（脱落など）か、後続文（continuation sentence）ないしそれ以降の部分の訳出に影響が及ぶ。

予測：作動記憶容量（注意の焦点の容量）が約 3-4 項目であり、「容量制限効果」があるならば、とくに統語的に非対称な言語間の同時通訳の際、通訳者はこの厳しい認知的制約を回避するために、統語的再構成を中心とする訳出方略を絶えず繰り出しているはずである。その方略は「最小チャンク保持方略」か「最小逆行統合方略」である。（pp. 219-220）

ここで、本書が理知的に抑制の利いたテイストになっているのは、水野が研究方法として「理解・産出と変換（translation）が自動的であるような素材、つまり作動記憶への理解努力と産出努力の負荷が 0（あるいはその近辺）で、変換もほぼ自動的であると考えられるような素材を選ぶ」とし、これによって「作動記憶内の保持操作のみを問題にすることができる」としているからである（p. 221）。

そしてこの仮説と予測を検証するため、英日同時通訳と日英同時通訳のデータを分析し、暫定的結論としてこの仮説と予測はほぼ確証（corroborated）され、かなり明確な傾向として確認されたと言えるとしている（pp. 252-253）。

このように本書を瞬時に横断して読み解いてしまえば、実に簡素な結果が出たと思う向きもあるかもしれない。しかしながら、これまでの同時通訳の研究は複雑多岐にわたり、ある意味で迷宮入りしてきた感さえあるところ、水野は自身の原点の疑問を解き明かすため極めて抑制的に問いを立て、「部分的実証への道筋」を明確に示したのである。

では、その明確な道筋をどのように得たのであろうか。そのヒントになるのが、本書の構成である。

3. 本書の構成：原点たる疑問を解き明かす手順

本書は大きく 4 章からなる。序章「同時通訳の基本問題構成」、第 2 章「同時通訳の理論モデル:プロセスモデルを中心に」、第 3 章「同時通訳と作動記憶の理論」、第 4 章「同時通訳コーパス分析」。

まず序章では同時通訳とはどのような作業かという素朴な疑問から始まる。先行研究を紹介しつつ（具体的な先行研究の文献は本書を参照）、それは「闇の中へと跳躍し、自らの文法的未来を抵当にいれる」ものだという引用から始まり（p. 11）、「理解と記憶保持、翻訳（言語変換）、検索、産出という複数のプロセスが同時に行われる、認知的にきわめて複雑なタスクである」（p. 12）、つまり「同時性」を大きな特徴とする作業であるという（p. 13）。そしてこれは「ワーキング・メモリの極限状態での作業」（苧坂満里子）であり、「作動記憶の資源を様々な同時的タスクに配分する作業」（Min-Hua Liu）であると操作的に記述する（p. 15）。その上で、「本書では通訳者に課される様々な認知的制約のうち、とくに作動記憶に焦点を合わせて分析する」という見通しを立てている（p. 17）。

ついで第 2 章ではプロセスモデルを中心に同時通訳の先行研究を扱う。順に挙げると、David Gerver の同時通訳のフルプロセス情報処理モデル、Barbara Moser の情報処理モデル、Danica Seleskovitch の意味の理論、Michel Paradis の同時通訳の神経言語学的一般理論モデル、Valeria Darò & Franco Fabbro の言語記憶モデル、Kurt Kohn & Sylvia Kalina のメンタルモデルによる同時通訳モデル、Robin Setton の語用論的・認知的同時通訳理論、船山仲他の概念的複合体モデル、Daniel Gile の努力モデル・綱渡り仮説、Kilian Seeber の認知負荷モデル、以上 10 のモデルを主要な先行研究としておのおの批判的に概観する。

第 3 章では実際の通訳データの観察を行うための理論的道具立てを整理する。その道具のひとつが作動記憶であり、第 2 章で同時通訳における認知的制約の観点から先行研究を批判的に検討したことを承けて、次の項目を検討する。通訳者と非通訳者との比較、Miriam Shlesinger の戦略的作動記憶資源配分論と Min-Hua Liu の専門技能としての同時通訳、Daniel Gile の負荷の import と export、同時通訳と方略：統語的再構成（全般的訳出方略、統語的再構成方略、予測）、英日同時通訳と訳出方略（英語と日本語の統語的鏡像関係、英日同時通訳の負荷と統語的再構成方略、日英同時通訳の統語的再構成方略、方向による差異と日本語の予測可能性、予測を伴わない日英同時通訳方略）、理論的前提（意味の扱い、chunking、Nelson Cowan の作動記憶モデル、Alan Baddeley モデルとの関係、注意分割と注意切り替え、コアの作動記憶容量、構音抑制と作動記憶、Cowan モデルに対する批判と総合、Time-Based Resource-Sharing モデル）、言語理解システム・言語産出システムと作動記憶（言語理解と作動記憶、言語変換、言語産出と作動記憶、アクセス可能性効果と干渉、統語的プライミングと目標言語からの引き寄せ、同時通訳の漸進性）、代理指標としての記憶項目と自動性、結論、を扱う。

特筆すべき本書の優れた点は、上掲の仮説に至るまでの前提的結論を明確に導出し、それに基づいた頑強な実験デザインを構築したうえで第 4 章の実験を行っている点である。その前提的結論とは以下のとおりである（本書のゴチックで表記された箇所を頼りにまとめる）。

・作動記憶とは長期記憶が一時的に活性化した部分である。
・その内部の活性化された記憶（activated portion of memory）は長期記憶の一部が一時的に活性化された状態を示す。活性化は同じ特徴を持つ他の刺激からの干渉や減衰のために、再活性化しない限り 10 秒から 20 秒で消失する。――Cowan は明示的に言及していないが、「状況モデル」や「メンタルモデル」、文脈情報はここで作られ、保持される。
・さらにその内部の注意の焦点（focus of attention）は、極めてアクセス性の高い、より完全な処理がなされる。これには時間的限界ではなく厳しい容量の制約があり、無関係な項目（チャンク）なら 3 から 5 項目（あるいは 4 項目、4 チャンク、構音抑制下では 3 チャンク）しか保持できない。（以上、pp. 163-165）
・処理と情報保持は注意という同一の、限定的な資源に依存する。
・処理と保持の両方に関わる認知的タスクは一度にひとつだけしか行えない。
・注意が焦点化する記憶項目は活性化されるが、注意が切り替えられると活性化は時間的減衰をこうむる。
・注意の焦点の容量制限、焦点外の記憶の時間的減衰のため、注意の分有は処理から保持への急速で絶え間ない注意の切り替えを通じて達成される。
・「認知的負荷は注意把持の持続時間に依存する」。したがって、特定項目の処理時間の全処理時間に対する比率は認知負荷の代理指標（proxy）となる。また処理のための注意把持の持続時間が増大すれば、記憶減衰は大きくなる。
・仮に言語理解（L/A）や記憶（M）、言語変換と産出（T/P）がそれぞれ別のリソースに依存していたとしても、それらの認知負荷は保持すべき項目の増大という単一の基準に還元して考えることができる。そう考えれば同時通訳の認知的負荷は基本的には作動記憶の焦点に保持する項目数に依存することになる。（以上、pp. 182-184）
・高度の自動性を備えた通訳者を前提とすれば、通訳者の負荷はもっぱら作動記憶の注意の焦点での記憶項目保持の負荷から生じる、と考えることができる。
・処理（task）の難しさ（＝「努力」・負荷の大きさ）は処理の遅延となってあらわれ、処理の遅延は記憶保持項目の増加としてあらわれ、その結果として誤りや脱落が生じる。
・この条件下では Gile のいう EOIs（脱落や誤り）はすべて注意の焦点での保持項目の増加から生じることになる。（以上、pp. 215-216）

本書の最大の優れた特長は、同時通訳の多面的でブラックボックス的な側面を、どのように単一の代理指標に落とし込んで測定したらよいを明確に意識して、注意の焦点での保持項目数を指標（単位）として実験デザインを構築している点である。「認知負荷」であろうと「努力」であろうと、その実態を可視化して、何らかの物質的なデータとして取り出すことができなければ有効な分析は困難であるが、水野は次のような

分析手法を手に入れたのである。

> われわれはここまでのところ、作動記憶の容量と制約要因を考え、作動記憶の注意の焦点に保持する項目数を増大させる大きな要因として、言語間の構造的非対称性、理解（L/A）、産出（P）、変換（T）プロセスの遅延、そして通常の遅延だけでなく訳出方略（の欠如）を挙げたが、このように考えることでわれわれは、タスクの違いによる負荷の通分不可能性という難問を回避し、同時通訳のデータの新しい分析手法を手に入れることができる。（pp. 216）

最後の第 4 章では英日・日英同時通訳コーパスの分析を行う。理論的前提、仮説、方法、分析（英日同時通訳）、日英同時通訳を扱い、最後に暫定的結論を提示している。統語的再構成が行われている箇所として、英日の場合は関係節、前置された従属節の補文標識、不定詞句、後置された前置詞句、unless 構文を、日英の場合は動詞句、特に副詞による予測と目的語を主語に訳出した箇所を分析している。

水野は本書の最後の箇所でも「暫定的結論」と称し、本研究は小規模のパイロットスタディだとして自ら導出した結論に対しても謙虚な姿勢を見せている。そのうえで、「過負荷を回避する統語的再構成方略は同時通訳を可能にするための、きわめて重要だがひとつの条件にしかすぎない」としたうえで、いくつかの通訳教育・訓練への示唆を提供している点を記しておきたい。

- 同時通訳が可能になるためには、まず理解、変換（訳語検索）、産出の面で相当高度な自動性が達成できているという条件が必要である。
- 心内のバイリンガル辞書の効率化も必要である。
- 最も重要なのは作動記憶の制約に対処するための訳出方略の獲得とその自動化であろう。訳出方略の集成を身体化したもの、それが通訳スキルの中核を形成する。（p. 253）

4. 本書を承けて

本書を承けて、われわれ（これは水野のいう哲学的 we、理論的 we ではなく、著者に続く後進の者たちという意味）は、水野が提示した今後の課題に取り組んでいく必要がある。「今後はデータをすべて検討してその他の方略とその頻度を洗い出したり、別のコーパスを用いてさらに検討する必要がある」（p. 253）とあるように、多種多様な同時通訳データのコーパス化、それを利用した特定項目の処理時間の全処理時間に対する比率の測定などによる、水野の暫定的結論を裏付ける、あるいは修正・改良する作業を行うことが課題となる。同時に、同時通訳の理論研究をさらに深め、既存の諸説の（再）検証、他の学際領域との架橋、それのみならず他の学術領域に対し同時通訳研究の知見を積極的に紹介し、同時通訳研究の重要性を知らしめることも大切で

あろう。そのためにも、本書の英語による翻訳書を世に出すことも、世界的な規模での議論の引き金を弾く上で強く望まれる。さらに、水野が提示した上掲の通訳教育・訓練への示唆も、本書を契機に充足していく必要がある。われわれは様々な課題を水野から頂いたのである。

最後に、本書は知性のあり方の大きな知恵を授けてくれた本であると筆者は理解している。世の中は概して活性化することばかり唱えるのであるが、抑制を利かす知恵や心の在りようの重要性を学んだことが本書の大きな収穫であると思う。

……..

【著者紹介】

河原清志（KAWAHARA, Kiyoshi）　関西大学教授。本学会副会長。

……..